

## ■読みに困難のある子どもたちへの実践事例

### 読みの困難を抱えた児童への読書活動での活用④

#### —「選ぶ喜び」を広げる読書環境を目指して

島根県松江市立意東小学校  
井上賞子

#### 研究目的

読みに困難のある子どもたちに対し、音声の補助がある読書環境を整えていくことで、読書から得られた情報を活用し、学習場面に生かしていく体験につなげていく。

#### 活用実態

##### (1)対象となる子どもの「読書」状況の推移 〈入学直後〉

Aさんは、自閉症・情緒障害特別支援学級の4年生です。入学した段階では、1文字も読むことができず、自分の名前のかたまりの判別も困難でした。

読み聞かせの場面では、楽しそうにお話を聞く様子も見られたことから、聞くと状況をイメージすることはできていると推察しましたが、自分から絵本を手取る姿は見られませんでした。

また、基本的な名詞や動詞の語彙はありましたが、形容詞や擬態語などでわからない言葉が多くありました。家庭での様子を聞いても、ストーリーのあるアニメーションはあまり好まず、ゲームをして遊ぶことが多いとのことでした。

##### 〈1年時〉

音と文字をつなげていくことを意識しての取り組みの中で、文字の習得が進み、デイジー教科書等を活用し、「音を補う」ことで内容の理解も確かになっていきました。しかし、自分から本を手取ることはなく、あくまでも「読めと言われたから読む」という状況で、「読書を楽しむ」というところまでは至っていませんでした。

##### 〈2年時〉

わいわい文庫のポスターの活用→絵本アプリの導入→読書記録での振り返りと、音声図書の活用を広げていく中で、「読みたい本を選んで読書を楽しむ」姿が広がっていきました。音声図書を1年間で400冊近く読む中で語彙も増え、絵の多い紙媒体の図書や漫画などにも関心を向けていきました。(『わいわい文庫活用術⑥』参照)

##### 〈3年時〉

「情報活用力育成」を目指して、意図的に教科学習に絡めてわいわい文庫を活

用したことで、読書によって得られた知識を活用したり参照したりして学んでいく体験につなげることができました。（『わいわい文庫活用術⑦』参照）

※わいわい文庫の活用は、特別支援学級に在籍しているAさんだけでなく、通常学級にいる読みに困難のある子どもたちにとっても有効で必然があると思いました。そこで今年度は、そうした子どもたちにとっても「紙の図書と同様に、読みたいときにすぐに読むことができる読書環境整備」を目指した取り組みを行いました。

## 現状の問題点

### 〈タブレットで読書したいと思った時〉

- わいわい文庫はCDで提供いただっており、ドライブのない端末で見るためには、あらかじめデータを端末に入れておくことが必要になる
- たくさんの本のデータを入れておくことは容量的にむずかしく、どうしてもその都度入れるという作業が必要になる
- いくつかのデータを入れておくことはできるが、再生アプリはいずれも目次の段階では書影が見えないため、「選ぶ」作業に手間がかかる

### 〈どの端末でも共通の問題として〉

- 書影ポスターで読みたいものを決め

ても、そのデータをたくさんのデータから探し出してインストールするのにいくつもの行程が必要で、なかなか子どもだけではむずかしい

※「読みたい」→「読めた」が子どもだけで完結しない状況は、読書を「日常的に楽しむ」ことにつながりません。「誰かがいないとできない」という実態から、「自分の思いや必要に応じてアクセスできる」状況にしたいと考えました。

### 〈改善への試み〉

- ①書影ポスターから本を選びやすくする
  - 書影ポスターにCDごとにナンバリングしてシールを貼っていく
  - シールを貼ったポスターをラミネートする
  - 閲覧台を作成し、本を探しやすくする

閲覧台には、見やすいように傾斜をつけている。また、上部に大きなリングをつけてA3の大きさのあるラミネートしたポスターもめくりやすくした。



めくった状態



CDごとに書影に番号シールを貼る  
Ex.)2016、ver.2、④



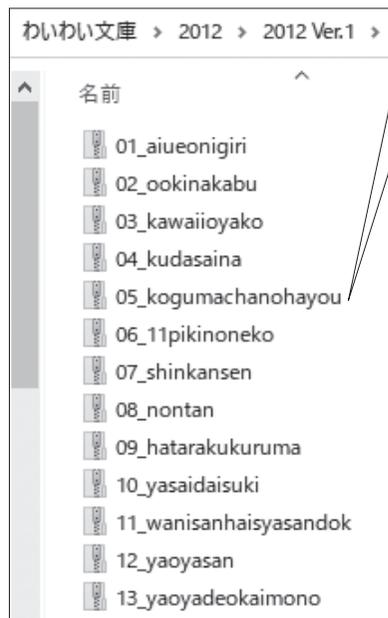
## ②選んだ図書へのアクセスをしやすくする

- データをあらかじめすべて圧縮し、書影にナンバーを割り当てる(圧縮データにひらがな名をつけると読み込めない。しかし、ローマ字では子どもたちが探せない。そのため数字を割り当てた)
- 「わいわい文庫」には、同じ図書でも「方言版」などが複数入っているものがあるが、そうした特別なデータが必要な際は、大人がフォローすることを前提に、スタンダードな読み上げ版のみ、圧縮データにしていった。
- 「年度→Ver→書影番号」を階層にしたデータを作成し、だれでも閲覧できるブルー版とそれ以外にわけてSD

カードに入れた。

- ドキュメントファイルのデータをやりとりできるカードリーダーを購入し、閲覧用のiPadにSDカードを読み込むアプリをインストールした。

圧縮したデータに番号をつけて階層にしたところ  
Ex.)2012→ver.1→データ



iPadに読み込んでいるところ



## ③活用場面の広がりを目指して

- データの入ったSDカードとカード

リーダーをセットにして複数準備し、対象となる子どもがいる学級の端末でいつでも利用できるようにした。

- 誰でも閲覧できるブルー版とカードを分けることで、学級全体への読み聞かせなどの場面での活用をしやすくした。
- データの読み込み方についての動画を作成し、各学年の端末に入れておくことで、教師や子どもが操作方法を確認しやすくした。



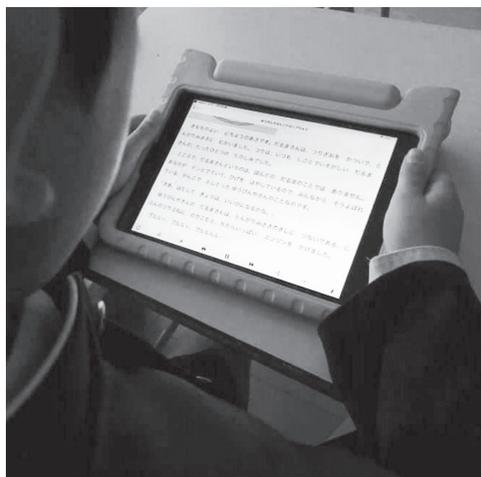
4セット準備し、知的の学級には常時貸し出し、他3セットを通常級の要請に応じて貸し出せるようにした

#### 〈対象児の姿から〉

- いままでは読みたいものを単年度のポスターから探していたため、読みたい本から読んでいき、あとは「まだこれが残っているから」ととりあえず選んでいましたが、複数年度のポスター

から探しやすくなったことで、「これ読みたい」「こっちはちょっと長いかな」とポスターをめくり、書影を見ながら悩む姿が見られるようになりました。

- データの取り込みは、階層を作ったことと番号を付けたことで探しやすく、1回のレクチャーですぐに覚えて、自分で読みたい本のデータにアクセスすることができていました。



#### 〈校内への広がり〉

- すぐにデータにアクセスできること、手元の端末で読めることなどから、これまでより活用へのハードルが低くなったと感じています。
- 全員への読み聞かせをブルー版で行うことで、「わいわい文庫」の良さや操作の方法についてもふれる機会が増えています。

### 〈考察〉

Aさんにとって、音声データのある読書は日常になっています。読書を楽しみ、情報にアクセスして思考できる、その成果を他の子どもたちにも広げていきたいとずっと取り組んできていましたが、なかなか呼びかけるだけでは広がっていかない実態がありました。

今年度、物理的なアクセスのしやすさに重点を絞って環境整備を行っていったことで、活用場面が広がり、読みに困難を抱えた子どもたちにとっても「読書を楽しむ」ことが日常に近づいてきたのではないかと感じています。

### 来年度に向けて

今年度の取り組みをさらに広げていくことを考えています。

再生時間や内容でグルーピングしたリストを作り、それに合わせたデータリストをカードに分けて準備することで、より「探しやすい」「手に取りやすい」環境整備を目指したいと考えています。

また、書影データもポスターをそのまま使うのではなく、ポスターから書籍ごとに切り取ったものを準備して、グルーピングしたリストごとの書影棚を作るなど、より子どもたちが楽しみながら選びやすい状況を作りたいです。

